本　　社／松江市殿町383 山陰中央ビル
TEL0852-32-3440
西部本社／浜田市竹迫町2886
TEL0855-22-0109

東京支社／東京都中央区築地4-1-1 東劇ビル17階
TEL03-3248-1980
大阪支社／大阪市北区西天満3-13-18 島根ビル3階
TEL06-6361-7187
広島支社／広島市中区立町1-23 ごうぎん広島ビル5階
TEL082-246-9033

出雲総局／出雲市渡橋町1228
TEL0853-21-0019
益田総局／益田市常盤町3-28
TEL0856-22-1800
鳥取総局／鳥取市栄町401 本通りビル2階
TEL0857-39-1188
米子総局／米子市東福原2-1-1 わこうビル2階
TEL0859-34-5211

安来支局／安来市安来町762-1
TEL0854-22-2069
雲南支局／雲南市木次町里方1007-3
TEL0854-42-0062
ひらた通信部／出雲市平田町2307-1
TEL0853-27-9941
隠岐支局／隠岐の島町港町塩口63-1
TEL08512-2-0356
大田支局／大田市大田町大田イ294-3
TEL0854-84-9065
江津支局／江津市江津町1524-4
TEL0855-52-2347
川本支局／川本町川本332-40
TEL0855-72-3010
邑南通信部／邑南町矢上33-1
TEL0855-95-1330
津和野支局／津和野町後田ロ473
TEL0856-72-1678
境港支局／境港市上道町3246
TEL0859-42-3529

新聞を越える。

会社案内

Corporate Profile

山陰中央新報社

地域に寄り添うメディアとして

代表取締役社長
松 尾 倫 男

山陰中央新報社は、来る2027年に創刊145周年を迎えます。1882年（明治15）年5月に創刊された山陰新聞社が源流です。以来、地域メディアとして一貫して読者とともに歩む姿勢を貫き、おかげさまで山陰両県における最大発行部数を誇る新聞社として成長することができました。

取材拠点は、山陰両県16か所と東京、大阪、広島。自社記事に加えて、契約している通信社・共同通信社から配信される国内外のニュースを織り交ぜた日刊紙「山陰中央新報」の発行をはじめ、デジタル版ニュース「山陰中央新報デジタル（Sデジ）」、山陰随一の経済専門週刊誌「山陰経済ウイークリー」、女性向けの生活情報紙「りびえ−る」「りびえ−るWeb版」など多角的なメディア発信事業を展開。全国で唯一、県庁所在地に立地する中国電力島根原発2号機の再稼働問題や人口減少による利用者減に起因するJRやバス路線の存続問題、JR松江駅前の再開発問題などについては、地域ジャーナリズムを堅持し、読者から高い支持を得ています。

一方近年、新たなニュース配信方法としてクローズアップされているのがデジタル版です。スマートフォンの普及によって、ニュースを個人レベルで受信することが可能なため、23年8月にはデジタル版ニュース「Sデジ」を大幅にリニューアル。各種ニュースの速報や解説に加えて、プロバスケットボールの日本トップリーグに加盟する「島根スサノオマジック」やオリジナル記事配信を強化するとともに、各自治体に届け出をされた死亡者の住所、氏名などの情報を新聞紙面より大幅に早く配信するなど、新聞紙面と両輪で地域密着ニュースを強化しています。登録者数は現在約7万人。今後の伸びも期待されています。

数々のニュース発信事業に裏打ちされた高い信頼性を背景に、各種事業も活発に推進しています。文化事業では、京都、金沢と並ぶ日本三大茶会の一つ「松江城大茶会」や女性を対象にした会員組織「YUI」の講演会、文化センター（松江、出雲）の運営など。スポーツ事業では女子プロゴルフの「山陰ご縁むす美レディース」、全国から5000人が参加する「国宝松江城マラソン大会」、浜田―益田間を結ぶ「しおかぜ駅伝」、小・中学校の野球大会などです。幅広い世代が交流する「子ども食堂」も22年からスタートするなど地域貢献活動にも取り組んでいます。

人口減少対策や市街地活性化の一環として島根県出雲市では開発事業「出雲プロジェクト」を展開中です。本社をアメリカに置く大型コーヒーチェーンの誘致をはじめ、商業テナントが入居する複合商業ビル「ENnoZA」の建設（24年11月）など地元経済界と一体となった魅力ある街づくりへの提案も続けています。

時代が変わり、デジタル化が加速しても、ニュースや情報の正確性、信頼性に優れた新聞社の存在意義は変わりません。これからも、地域の皆さんと共に考え率先して行動する新聞社として、暮らしに役立つ情報発信をベースに魅力ある地域づくりに貢献したいと考えています。

（松江市殿町にあった島根新聞社の社屋）

（松江市袖師町に移転新築したころの社屋）

（平成27年に見学者ホール「しんぶん学聞館」を併設した山陰中央新報製作センター）

沿　革

1882（M15）5月 1日	山陰新聞社創立
1901（M34）11月 3日	松陽新報社創立
1942（S17）1月 1日	松陽新報社と山陰新聞社が合併、株式会社島根新聞社となる 島根新聞創刊第1号を発行
1949（S24）10月 1日	有限会社夕刊島根新聞社を設立、夕刊島根を創刊
1950（S25）2月15日	夕刊島根を夕刊山陰に改題
1952（S27）4月 1日	社名を山陰新報社に変更、題号を山陰新報とする 夕刊島根新聞社を合併
1957（S32）10月 1日	題号を島根新聞に変更
11月23日	社名を島根新聞社に変更
1964（S39）11月21日	本社社屋を松江市袖師町に新築、移転
1969（S44）7月28日	島根新聞紙齢1万号となる
1973（S48）3月25日	社名を山陰中央新報社に変更、題号を山陰中央新報とし、島根、鳥取両県域に取材、営業網を拡大
1978（S53）5月31日	松江市東朝日町に印刷工場を建設、「超高速オフセット輪転機」を導入、新聞にカラー印刷を取り入れる
1982（S57）4月 1日	西部本社を創設
5月 1日	創刊100周年を迎える
8月 1日	益田市あけぼの本町に西部本社を新築、移転
8月24日	松江市殿町の旧島根新聞社跡地に山陰中央ビルを建設、同ビルに本社を移す
1983（S58）6月28日	鳥取市西町に鳥取本社を創設
1991（H 3）7月 3日	企画記事「いのち―医療現場から」が第10回アップジョン医学記事賞を受賞
1996（H 8）11月 1日	ひかわ製作センター新輪転機が稼動
1997（H 9）8月 2日	紙齢2万号となる
10月20日	「香りの広告シリーズ」で日本新聞協会新聞広告賞奨励賞を受賞
2000（H12）8月 1日	ホームページを開設
2002（H14）5月 1日	創刊120周年を迎える
2003（H15）10月20日	「しまね子ども環境バンク」で日本新聞協会新聞広告賞奨励賞を受賞
2004（H16）2月25日	浜田ビルが完成
12月25日	発行部数18万部を突破
2006（H18）11月28日	新組版システム「新SWAN II」稼働
2007（H19）3月 1日	浜田総局を西部本社に改め、米子総局に中海事業センターを併設
5月 1日	創刊125周年を迎える
8月22日	移動編集車「サンちゃん号」導入
9月26日	超高速輪転機増設
10月 1日	題字を変更し紙面改編
2008（H20）4月 1日	山陰中央新報製作センター発足
9月18日	第27回「ファイザー医学記事賞」大賞を受賞
2010（H22）4月 1日	出雲・鳥取、石見の2版制に移行
2011（H23）9月 6日	紙齢2万5000号となる
2012（H24）5月 1日	創刊130周年を迎える
2013（H25）10月16日	「環りの海」（琉球新報社との合同企画）で日本新聞協会の平成25年度新聞協会賞を受賞
2014（H26）3月 1日	紙面の編集段数を15段から12段に変更
3月26日	製作センターに高速カラーオフセット輪転機5基を導入。既設機と合わせて2セット体制を確立
4月 1日	無料会員組織「さんさんクラブ」スタート
11月 5日	子ども向けの無料新聞「週刊さんいん学聞」を創刊（毎週水曜日発行）
2015（H27）6月29日	新聞制作共有システム素材管理始動
11月25日	製作センターに見学者ホール「しんぶん学聞館」完成
2016（H28）1月18日	「しんぶん学聞館」見学者受け入れ開始
2017（H29）1月	発行部数18万5,000部となる
4月	製作センターの輪転機3基と発送関連設備を更新
2017（H29）5月 1日	創刊135周年を迎える
2018（H30）4月 2日	新聞制作共有システム組版始動
2021（R 3）4月 1日	山陰中央新報デジタル「Sデジ」スタート
2022（R 4）5月 1日	創刊140周年を迎える
2023（R 5）5月15日	6階フロアリニューアル
8月 1日	「Sデジ」リニューアル

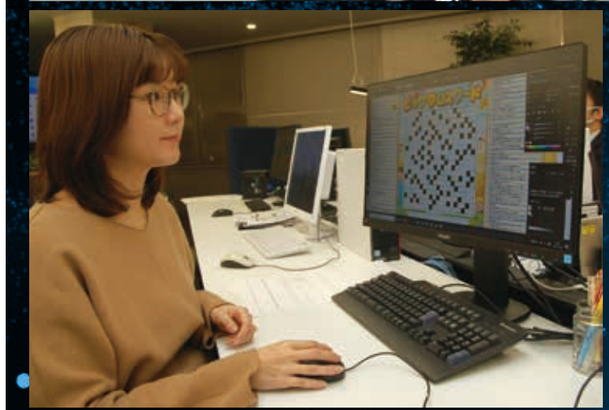
山陰地方をカバーする情報ネットワーク

会社概要

本　　社	〒690-8668 松江市殿町383　山陰中央ビル 電話0852−32−3440
設　　立	1882（明治15）年5月1日
資 本 金	1億8,690万円
従 業 員	272人（2024年12月現在）

本社機構図

- 取締役会
  - 論説委員会
    - 読者室
  - 編集局
    - 報道部
    - 政経部
    - 情報部
  - 編成局
    - 整理部
    - グラフィックス部
  - 未来戦略局
    - デジタル推進部
      - エディトリアルチーム
      - マーケティングチーム
  - 読者局
    - 読者部
    - 管理部
    - 読者戦略部
  - ビジネスプロデュース局
    - マーケティング部
    - 地域ソリューション部
    - 業務推進室
    - Teamりびえ〜る
    - 編成部
  - 文化事業局
    - 事業部
      - 事業担当
      - 観光担当
    - 出版部
    - 文化振興部
    - 文化センター
      - 松江教室
      - 出雲教室
    - 山陰中央新報政経懇話会
  - 総務局
    - 秘書室
    - 人事総務部
    - 財務部
      - 経理グループ
      - 管財グループ
    - システム開発部
    - 山陰中央新報社会福祉事業団
- 本社
  - 東京支社
    - 営業部
    - 報道担当
  - 大阪支社
    - 営業部
  - 広島支社
    - 営業部
    - 報道担当
  - 出雲総局
    - 報道部
    - 営業部
  - ひらた通信部
  - 雲南支局
  - 安来支局
  - 隠岐支局
  - 西部本社
    - 報道部
    - 読者部
    - 営業部
    - 大田支局
    - 川本支局
    - 邑南通信部
    - 江津支局
    - 益田総局
      - 報道部
    - 津和野支局
  - 米子総局
    - 報道部
    - 営業部
  - 鳥取総局
    - 報道部
  - 境港支局



地域とともに
私たちが伝えます

山陰中央新報が貫いてきたのは「地域のための報道」。
この地に暮らす人々に寄り添い、
日々の営みを伝え、支える存在であろう、と努めてきました。
製作技術がいかに革新されようと、
私たちはその信念をしっかりと受け継ぎ、情報を発信していきます。

いつでもどこでも、確かで、役に立つ　山陰中央新報デジタル

山陰中央新報の会員制電子版「山陰中央新報デジタル（Sデジ）」は、島根、鳥取両県の「今」を知らせるニュースサイトです。手のひらで、リビングやオフィスで、より速く、より詳しく、より分かりやすく、生活に密着した情報をタイムリーに届けたいとの思いで運営しています。

充実の速報、独自コンテンツ

ニュースを翌日の朝刊に先駆けて配信しています。交通情報や選挙の開票速報、山陰両県に関わる全国ニュースなどの速報は会員のスマートフォンに通知するほか、注目記事をメールやSNSを通じて届けます。取材現場の様子を伝える動画、写真特集、地域の話題や課題を深堀りしたSデジオリジナル記事も満載です。

ニュース以外の情報

島根、鳥取両県で開かれるイベントの情報を発信しています。楽しみながら脳を鍛えるコンテンツも配信しています。

SNS

注目記事や速報をX、LINEなどで発信しています。

ニュースレター

毎日、厳選した記事をメールでお届けしています。

脳トレ

クロスワードや数独などを日替わりで楽しめます。

写真特集・動画

紙面で載せきることができない写真やグラフ、動画を記事と合わせて閲覧できます。

「地域主義」「地域支援」の徹底

足元の豊かさを再発見する「地域主義」、新たな豊かさを追求する「地域支援」が理念です。記者一人一人が地域に入り込んで発信する意識を徹底し、読者と双方向の紙面作りを進めています。

島根、鳥取両県をはじめ、東京、広島に記者を配置。基本方針に▽地域の生き残りを考える報道▽ルポなど徹底した読者目線の報道▽具体的な道標を示す提言型報道―を掲げ、硬軟織り交ぜたニュースを発信しています。

2013年に琉球新報社（沖縄県）と合同で取り組んだ連載企画「環（めぐ）りの海」で新聞業界の最高賞である新聞協会賞を受賞しました。高速道路の片側1車線区間ではみ出し事故が相次いだ問題では、海外取材を含めた長期連載を展開し、解決策を国に提言。安全対策を進める機運を醸成しました。

また、最大24㌻のカラー面が印刷できる輪転機を生かし、迫力ある写真や見やすい図表を随所に掲載。ビジュアル効果を高めた紙面作りも心掛けています。本紙のデジタル版「山陰中央新報デジタル（Sデジ）」では、記者が取材した掲載記事を閲覧することができます。

選挙報道に力

社会事象や事件事故、政治、行政、住民の関心の高い生活密着型のニュース、地域社会で奮闘する人模様を描いた話題は「山陰社会面」「山陰総合面」で掲載しています。

力を入れているのが選挙報道です。国政選挙はもとより、地域住民の関心が高い市町村長選は前哨戦から詳しく伝えています。このほかにも、深く掘り下げた企画、リポートを随時掲載し、読み応えと分かりやすさを追求しています。

地域の話題から経済、スポーツまで網羅

心温まる話題は地域別のローカル面で展開し、山陰全域のローカルニュースを一覧できる紙面を提供しています。「さんいん特報班」など地域課題に焦点を当てた読み物も掲載しています。

地元の経済情勢や企業の動向などを伝える記事は、山陰経済面に収容し、経済の動きが一目で分かるようにしています。

スポーツは、テニスの錦織圭選手（松江市出身）の報道に力を入れ、海外である四大大会に記者を派遣。バスケットボールB1の島根スサノオマジックは経営面を交えて多角的に伝えています。

オピニオン力の強化

ニュースの核心を分かりやすく伝えるオピニオン力の強化に努めています。真相に迫る「ニュース追跡」のほか、社外の識者の寄稿、インタビューによる「羅針盤」「談論風発」をはじめ、ローカルからグローバルまで幅広い視点で物事を捉える企画も満載です。

役立つ生活情報詳しく

島根、鳥取両県のイベント情報を中心に、暮らしに役立つ生活情報を「生活アップデート」に集約。さまざまな催しや行事を広域的に紹介しています。

原稿執筆や打ち合わせに忙しい編集局フロア

第一線で取材する記者

記者同士の情報交換も欠かせない

人に寄り添い、心を豊かに

衣食住や健康、育児・教育、流行、娯楽など、暮らしにかかわる話題を硬軟取り混ぜて幅広く、分かりやすく提供しています。論壇や芸術、文芸、人文科学の今を取り上げるのが文化面。山陰の読者の知的好奇心に応えます。

読者参加の紙面で生まれる交流

読者投稿の「こだま」欄や、小学生から学生までの「こだま学園編」欄、心温まる話や愉快なエピソードを伝える「読者ふれあいページ」など、読者参加コーナーが好評を得ており、紙面を通じた交流も生まれています。1面に毎日掲載する「慈しみの心」は、インド哲学・仏教学の世界的権威である故中村元氏（松江市出身）が紹介したブッダの教えなどをつづり、読者の皆さんの生きる指針になっています。

地域密着取材から生まれる圧倒的ボリューム紙面

山陰唯一の経済週刊誌「山陰経済ウイークリー」

山陰両県で唯一の経済週刊誌となる「山陰経済ウイークリー」を発行し、地元経済の今を伝えています。1977年の創刊から45年以上の歴史があり、2020年4月には誌面を大幅リニューアルしました。表紙のデザインを一新したほか、ニュースを深く掘り下げる大型リポートや専門家によるタイムリーなコラム、誌上ゴルフレッスン、ランチスポット情報などの企画を掲載。ビジネスパーソンに役立つ誌面作りに努めています。

より質の高い紙面づくりへ

本社ビル6階に入る編集局と編成局のフロアを2023年5月、記者とデスク、編集局と編成局との意思疎通の強化などを目的にリニューアルしました。オフィスのコンセプトデザインは、専門職の集団が「作品」をつくりあげる工房空間をイメージしています。

編集局のデスク席をフロア中心部に配置することで、編成局や各記者とのコミュニケーションを取りやすい環境にしています。フロア内各所にはグリーン色の人工植物を配するなどして、明るい雰囲気の内装になっています。

編集局デスクエリア

記者席からなる編集局と編成局が交わるフロア中心部に「センターシンボルジャンク」として編集局のデスク席を配置しています。天井部やパーティションには、古来、日本で愛されている藍色の「ジャパニーズブルー」を配しています。

編成局エリア

政治、スポーツ、地域など担当する面単位で作業机の集団を形成しています。各作業机には整理作業を行う組版機が設置され、整理記者が作業をします。窓側には誰もが自由に使えるミーティングスペースを設けています。

休憩カフェスペース

天井と床を含めた内装を木目調に統一し、空間全体をカフェ風にデザインしました。休憩スペース内にも人工植物を配置して、気分転換やリフレッシュしやすい雰囲気にしています。

ソロワークブース

集中して作業ができるようにドア付きの個別ブースを複数設置しています。静かな環境での作業を可能にするとともにWebミーティングにも使用できます。隣には動画撮影が行えるスタジオがあります。

オープンブレストステップ

6階フロアを行き交う通路に設けたディスカッションスペース。壁の一方に段差を付け、ミーティングやソロワークができる空間になっていて、誰もがリラックスして使えるようになっています。

山陰、日本、世界が見える紙面づくり

取　材

本社をはじめ山陰両県の総局、支局や東京、広島の支社に取材記者がおり、政治、経済、社会、スポーツなど、さまざまな分野のニュースを追っています。記者には幅広い知識と的確な判断力、豊かな表現力が求められますが、新聞の社会的な役割を実感できる仕事です。

報道デスク

デスクはより良い記事を読者に読んでもらうため、記者に取材の観点や手法をアドバイスするほか、原稿のチェック、手直しをします。

共同通信社

世界、全国のニュースを山陰中央新報社などの加盟社に配信します。

整理部 / グラフィックス部

本社記者、共同通信社から送られてくる原稿や写真が集まります。地元はもとより全世界のニュースの価値を判断し、見出しを付けて専用のパソコンで組み上げます。掲載写真の加工、図版類の作製も手掛けます。

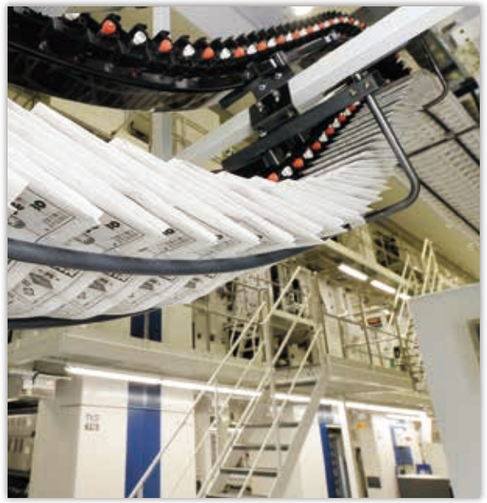
また、最先端の技術を駆使し、山陰中央新報デジタル（Sデジ）に関する業務も受け持っています。

新聞広告はビジネスプロデュース局編成部からデータ送信され、各掲載面に組み込まれます。

紙面をレイアウトする整理記者

高速回線

印　刷



印刷された新聞はキャリアで発送へと運ばれる

発送

配達

刷り上がった新聞は販売拠点ごとに機械でこん包し、待ち受けるトラックに積み込みます。その後、販売店に届けられ、一軒一軒丁寧に配達されます。

超高速輪転機で鮮明カラー印刷

編成局で組み上げた紙面は高速通信回線で、山陰中央新報製作センターに伝送。超高速オフセット輪転機を使って色鮮やかな紙面を印刷します。最大40ページ（カラー24ページ）の印刷が可能です。2017年4月にバックアップの輪転機3機と発送関連設備を更新し、一層の機能強化を図りました。

最新の印刷設備は色鮮やかな紙面を刷り上げる

見て 聞いて学ぶ 新聞社の仕事

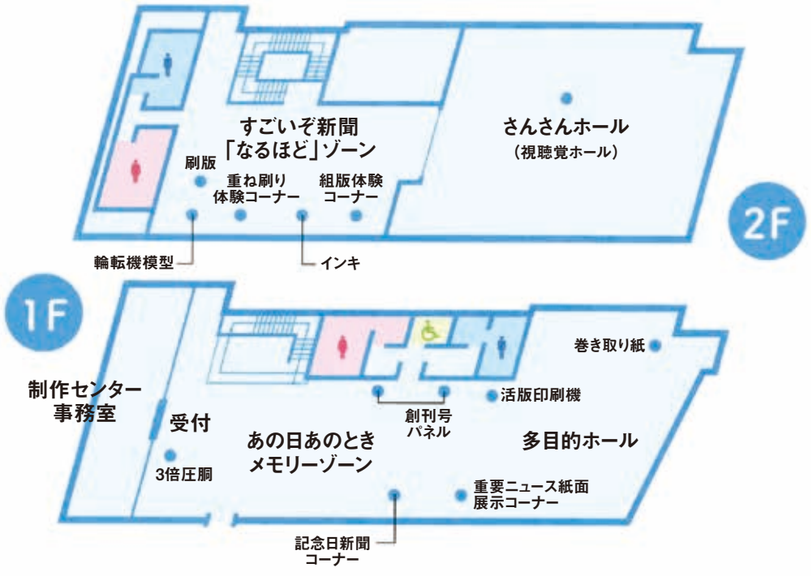
山陰中央新報「しんぶん学聞館（まなぶんかん）」

「しんぶん学聞館」（出雲市斐川町上庄原）は、山陰中央新報を印刷する工場「山陰中央新報製作センター」（同）に併設。新聞教室や工場見学、映像・展示資料などを通じ、新聞社の仕事について学べる施設です。

1階は、山陰地方の重大ニュース紙面、印刷資料（鉛活字、木版など）、新聞印刷に使う巻取紙の実物を展示。年月日を入力すると、その日の新聞が見られる「記念日新聞コーナー」もあります。

2階には188㌅の大型ディスプレーを備えた視聴覚ホールがあり、新聞社の1日に密着したビデオを上映します。ホール内で行う新聞教室では、新聞の役割や文章の書き方、報道現場の裏話などを紹介。さらに輪転機模型を使った講義もあり、印刷機械の仕組みを易しく解説します。

説明を受けた後は工場内を見学。高速で鮮明なカラー印刷を可能にしたタワー型輪転機をご覧いただけます。



案内メニュー

1階で記念撮影した後、2階のさんさんホールで映像「つながるメディア　山陰中央新報」をご覧いただきます。その後のモデルコースは次の通りです。

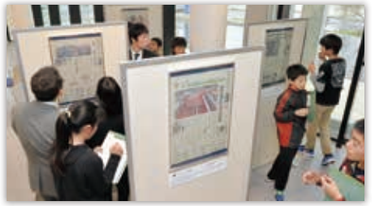
新聞教室
↓
輪転機模型
↓
高速輪転機
↓
展示資料
↓
実際の巻取用紙

あの日あのとき『メモリー』ゾーン

●創刊号パネル展示

山陰中央新報のルーツである「山陰新聞」「松陽新報」「島根新聞」の創刊号と、島根新聞から山陰中央新報に題号を改めた第1号の紙面をパネル展示しています。

●重要ニュース紙面展示コーナー



若槻礼次郎首相の「親任式」や竹下登氏の「首相指名」、東京五輪やくにびき国体、松江菓子博の開幕、山陰地方を襲った災害などを伝えた紙面を展示しています。

●記念日新聞コーナー

タッチパネルで年月日を入力すると、その日の新聞の1面が表示されます。現在、表示できるのは島根新聞創刊の1942年1月1日から88年12月31日までと2001年1月1日以降です。

●印刷資料の展示

新聞は現在、高速で大量の印刷が可能なオフセット輪転機で刷り上げていますが、本社では1978年5月までは活字を使った凸版印刷方式でした。その時代の工程を伝える資料として、活字、鉛版、紙型、写真の金属版などを展示しています。

すごいぞ新聞『なるほど』ゾーン

●カラー印刷解説用の輪転機模型

藍、紅、黄、黒の順に色を重ねるカラー印刷の仕組みを輪転機の模型で解説します。各色を印刷するローラー4組が上下に並んでいます。スイッチを入れると、ローラーの回転に合わせて紙が下から上へ動きます。そうした様子から四つの色を重ねて印刷する原理を理解してもらいます。

●さんさんホール

2階の北側にあり、広さ約180平方㍍、80人の収容が可能です。東側はガラス張りになっており、開放感あふれるホールです。47㌅の液晶パネル16枚を組み合わせた188㌅（横4.2㍍、縦2.4㍍）の大型ディスプレーを備えているのが大きな特長。見学者には新聞の魅力や山陰中央新報を紹介する映像をご覧いただきます。

●組版体験コーナー

実際の紙面レイアウトで使っているパソコンが設置してあり、見出しづくりやレイアウトなどを体験することができます。

見学予約　しんぶん学聞館の見学は、電話での予約をお願いします。

◆**入館時間**＝土・日・祝日を除く平日午前10時～午後2時30分

◆**人　　数**＝1日2団体、1回40人まで

◆**お申し込み、問い合わせ先**

山陰中央新報製作センター

（出雲市斐川町上庄原1318）＝平日午前9時～午後5時　電話 0853（73）9331

圧倒的な情報発信力と高い信頼

企業・団体と連携し、地域活性化

山陰最大の発行部数を誇る山陰中央新報。山陰両県はもとより、全国のクライアントが広告を掲載しています。情報発信ツールとしてクライアントから高い信頼を得ています。

山陰両県は全国に先駆けて人口減少が進む地域です。島根県内で就職活動する若者に交通費や宿泊費を助成する「未来サポートプログラム」、島根の次世代を担う若者（35歳以下）を紹介する「4U35」などを協賛企業・団体と連携して展開しています。県内の高校を卒業した後も、島根県とのつながりを大切にしながら暮らす学生たちを紹介する記事体広告を掲載するなど、定住を促進し、地域活性化を図る取り組みを展開しています。

暮らしに役立つサブメディア、デジタルにも力 イベント開催も

地域で生活を楽しむための情報を載せた「りびえーる」は、月2回の発行に加え、ホームページやInstagram、Facebook、Xでも情報を発信。山陰両県を代表する企業経営者のインタビュー集「山陰リーダーズ・アイ」など多くの広告企画で、多媒体による情報発信に力を入れています。「山陰中央新報デジタル」（Sデジ）に広告枠を設け、企業・団体の情報を発信しています。

りびえーる、いわみ りびえーる

毎月第2、第4日曜日、中海・宍道湖圏域と、島根県西部で発行しているタブロイド判フリーペーパーです。グルメ、雑貨、ファッション、観光、園芸、子育てと幅広く生活情報を紹介し、女性から圧倒的な支持を得ています。

あ・るっく、Story（ストーリー）

山陰両県はもちろん、近隣県の旬のスポットを紹介する観光情報紙「あ・るっく」、若者の島根県内定住を目的にした雑誌スタイルの「Story(ストーリー)」などを発行しています。

山陰リーダーズ・アイ

山陰両県の企業、団体のトップが将来の展望や地域への思いを語る「山陰リーダーズ・アイ」は、Sデジ内に特設サイトを立ち上げ、「リーダーの横顔」など紙面では掲載しきれない内容も紹介しています。

文化、スポーツ、芸術 … 地域活性化　バックアップ

事　業

県民、読者が楽しみ、喜んでもらえる企画事業を展開しています。

４期目を迎え、1,100人の会員数を誇る「女性クラブYUI」はバージョンアップし、厳選したゲストによるトークショーを開催。2024年秋に歌舞伎俳優の十三代目市川團十郎白猿さんの襲名披露巡業公演を実施しました。このほか、各種スポーツ大会や展覧会など、さまざまなイベントを幅広く手掛けています。

女性クラブYUI

十三代目市川團十郎白猿 襲名披露巡業

<スポーツ事業>

スポーツ関係は「宍道湖一周駅伝競走大会」「浜田－益田間駅伝競走大会（しおかぜ駅伝）」などの陸上競技をはじめ、小中学生を対象にした野球大会やバレーボール大会、「島根県アマチュアゴルフ選手権競技」「山陰企業団体対抗ゴルフ大会」などを開催。スポーツ振興や子どもたちの健全育成に貢献しています。

宍道湖一周駅伝競走大会

<文化事業>

文化関係は「日本三大茶会」の一つである「松江城大茶会」を開催し、県内外から多くの来場者を集めています。「日本伝統工芸展」「再興院展」といった全国規模の大型美術展、地元の作家や子どもたちが出展する「日本の書展」「山陰子ども書道展」なども展開し、地域の文化芸術振興や人材育成に寄与しています。

松江城大茶会

観　光

自主企画や旅行代理店とタイアップした国内外の旅行商品を企画販売しています。出雲や米子空港からの海外チャーター便やフジドリームエアライン、日本航空などを利用した国内チャーター便も実施し、地元の空港から発着できる旅行として好評を得ています。バスツアーでは、日帰り旅行から宿泊付きの旅行など県内外の催事や花暦に合わせた旅行、ウォーキングを行程に盛り込んだ健康ツアーなど多種多彩な旅行商品を取り扱っています。

文化振興

指定管理の重責担う
―「国宝松江城」周辺の文化・観光施設を管理

<国宝松江城、興雲閣、武家屋敷、明々庵、赤山茶道会館>

松江のシンボル「国宝松江城」を中心に、城下町での暮らしぶりが垣間見える「武家屋敷」、島根県指定有形文化財で松江市歴史的風致形成建造物の「興雲閣」、大名茶人・不昧公の残した茶室「明々庵」「赤山茶道会館」の指定管理事業を展開しています。

地域文化の伝承や振興、情報発信に貢献しているほか、関連施設と連携して地域の基幹産業でもある観光振興事業はもちろん、歴史講座やスポーツイベントなども手掛けています。

国宝松江城

武家屋敷

赤山茶道会館

興雲閣

明々庵

多様な情報発信に力 地方創生に貢献

出　版

山陰の自然や歴史、文化を紹介する出版活動を展開しています。松江城をはじめ、石見銀山やたたら製鉄、出雲大社のガイド本などを発行。そのほか、地元文化人の伝記や紀行本、ビジネス書など幅広い分野で後世に残る本作りを手掛け、郷土の出版界をけん引しています。自治体や企業から依頼を受け、新聞社ならではの取材ネットワークと情報の蓄積を生かし、広報誌や記念誌、社史も編集、制作しています。

本社の出版物

<主な出版物>

- 日本の未来は島根がつくる
- 堀田仁助 ～蝦夷地を測った津和野藩士～
- 旅に唄あり 復刻新版
- 中村元 慈しみの心
- そりとむくり 彫刻家 澄川喜一
- 明窓 書き写しノート(改訂版)
- 国宝 松江城 ～美しき天守～(改訂版)
- 鉄のまほろば ～山陰 たたらの里を訪ねて～
- 古事記1300年 神話のふるさと ～山陰のゆかりの地を訪ねる～
- こども出雲国風土記(改訂版)
- マンガで親しむ出雲神話シリーズ･全4巻

文化センター

山陰中央新報社文化センターは、地域住民の生涯学習拠点として、松江、出雲の２教室で各種講座を開いており、多くの受講生に親しまれています。地域で活躍するトップクラスの講師陣を迎え、「学ぶ、出会う、楽しむ」をモットーに運営しています。

講座は茶道、華道、書道、舞踊、邦楽、手工芸など日本の伝統文化から、語学、歴史、料理、ダンス、健康づくり、園芸まで多種多様に展開。人生100年時代といわれ、リスキリング(学び直し)の機運が高まる中、教室は活気を帯びています。無料見学・体験もできます。

季節のスイーツ&紅茶講座

写真販売

本社主催の野球やバレーボールのスポーツ大会などで撮影した迫力ある場面や感動の瞬間を写真として販売しています。また、山陰中央新報の紙面に掲載された記事や写真を加工した額入り商品も製作し、記念として人気を集めています。

紙面に掲載された写真を販売

殿まちギャラリー

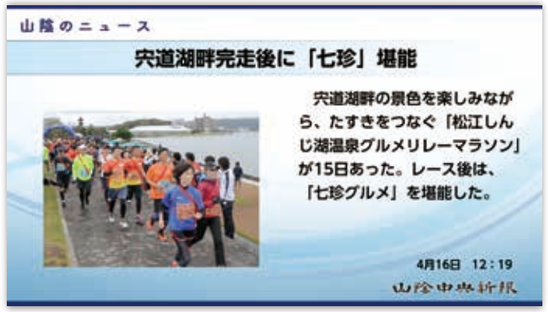
松江市南殿町地区の活性化につなげるため、空き店舗を改装して2002年６月にオープン。個人やグループによる絵画や写真、工芸、書などの作品展に利用され、市民の憩いの場として親しまれています。「山陰中央新報社 子どもご縁食堂」の会場にもなっており、多目的な利用が可能になっています。

デジタルサイネージ

山陰中央新報デジタルサイネージは、インターネット回線を使って山陰両県、国内外のニュースや天気予報などを、随時更新しながらリアルタイムで配信。空港や病院での企業PR、大学での人材確保など設置場所の属性に応じた広告、イベント情報などの発信もでき、速報も可能です。

現在は出雲縁結び空港、島根県立中央病院、松江市立病院、公立邑智病院、島根大学、島根県立大学浜田キャンパス、鳥取大学湖山キャンパス、米子鬼太郎空港で稼働しています。

出雲空港のデジタルサイネージ(電子看板)



圏域振興

日本海側有数の人口集積地である中海・宍道湖・大山圏域において、県境を超えた一体的な発展に向けて官民協働の連携事業を企画・運営しています。地域の優れた産品を発掘し圏域内外に発信する「山陰いいものマルシェ」や、人材育成事業「山陰まんなか未来創造塾」など、圏域の市長会、ブロック経済協議会などとタイアップし、圏域振興に取り組んでいます。

山陰いいものマルシェ(松江)

山陰まんなか未来創造塾

山陰最大の発行部数

「信頼」と「安心」を届ける販売ネットワーク

山陰中央新報は、山陰（島根県・鳥取県）最大の157,000部（2024年9月）の発行部数を誇ります。島根県内の市場占有率は7割以上で他紙を圧倒、地域ニュース満載の地元紙として、山陰経済ウイークリーや山陰中央デジタル（Sデジ）とともに絶大な信頼を得ています。

山陰両県約200店の地域に根差した販売所ネットワークを生かして、2006年8月には全販売所加盟の「山陰中央新報販売所防犯協力会」を結成。島根県や同県警と協定を結び、配達時に不審者や事故を発見した際の通報や防犯啓発、一人暮らしや夫婦だけの高齢者世帯などの安否を気遣う見守り活動を展開し、安心安全なまちづくりに努めています。

また、本紙を気軽にお試し読みいただける「試読紙キャンペーン」や、地域と連携した各種事業も展開し、より親しまれる新聞を目指しています。

1週間無料試読 プレゼントキャンペーン

山陰中央新報の紙面をもっと知ってほしい、手に取ってほしい、そんな気持ちから未購読家庭を対象に1週間のお試し読みを無料で行っています。お試し読みをしていただいた方にはプレゼントも進呈。新聞の魅力を知り読者になる方が相次いでいます。

購読受付

購読に関するお問い合わせはこちらから

フリーダイヤル
0120-49-2550

（月曜～土曜：9時30分～17時30分 日・祝日は除く）

山陰中央新報販売所の活動

販売所は新聞を配るだけでなく、地域に対する貢献活動にも力を入れています。

各地で開催されるさまざまなスポーツ大会や清掃活動を主催しています。読者のみなさんとのふれあいを大事にしています。

新聞に親しむきっかけを

ダンス動画で新聞をPR

若い世代に新聞のことを知ってもらおうと、若手の新聞販売所長と新聞社が協力し、PR動画を作成しました。新聞が読者に届くまでの「取材」、「印刷」、「配達」の過程を、若者に人気のダンスを絡めて表現しました。本格的なダンスが話題を集め、YouTubeでの再生回数は12万回を超えました。

子育てフェスin益田

わくわくタウン

集客イベントでにぎわい創出

地域の方々に喜んでもらおうと、2024年は「子育てフェスin益田」（7月）、「わくわくタウン」（9月、出雲ドーム）などの集客イベントを開催しました。飲食ブースやステージショーの実施で、大勢の親子連れに喜ばれました。

新聞活用ノート

小学生に新聞に親しんでもらうとともに、家庭内学習を支援しようと、2020年に作成したのが新聞活用ノートです。2021年冬に実施した「新聞活用ノートチャレンジ」は、島根県内で1,000人を超える小学生が参加し、「地域の記事や世界の記事に興味を持つきっかけになった」、「親子で新聞を読み、勉強になった」など、保護者や学校から大好評をいただいています。

読んで学んで ワクワクなるほど

週刊さんいん学聞（まなぶん）

地域の宝である子どもたちの健やかな成長に新聞を役立てたいと、2014年11月に子ども向けの新聞「週刊さんいん学聞（まなぶん）」を創刊しました。家族で新聞に親しみ、一緒に楽しく学べるように、日曜日付本紙内の見開き4㌻に掲載。抜き取って保存もできるようにしています。ニュースのポイントや背景を分かりやすく解説する「ニュースなぜなに」▽話題のニュースをピックアップして伝える「ニュースアラカルト」▽学習に使える「小学生基礎学力アップ講座」「高校入試対策講座」▽参加して楽しめるクロスワードクイズやイラストの「投稿ひろば」―など、学校や家庭で役立つ話題を満載しています。2024年6月には創刊500号を記念して、山陰のパリ五輪出場選手を特集するなど、特別紙面も定期的に企画しています。

NIE（Newspaper In Education＝教育に新聞を）

NIEで児童、生徒の学びを豊かに

新聞記者が学校に出向き授業を担当

NIE（Newspaper In Education＝教育に新聞を）は教育現場で新聞を活用してもらい、児童、生徒の皆さんの学びをより豊かにする取り組みです。

社会への関心を深め、読解力や表現力はもちろん、最近は、情報を的確に読み解く力を育成する活動として注目されています。

活動の柱の一つは学校への出前授業です。NIE担当者や記者を学校に派遣し、新聞の読み方、情報の集め方、文章の書き方や手作り新聞の作成指導などを行っています。オンラインでの新聞教室も行っています。

もう一つの柱は「しまね小中学生新聞コンクール」の開催です。新聞作りを通して思考力や表現力を磨き、思いを発信してもらうことを目的に開催し、2024年で13回目を迎えました。

三つ目の柱は、紙面での展開です。本紙では児童生徒の意見発表や新聞製作の場として「こだま学園編」、「元気はつらつ新聞」、「青春はつらつ新聞」、「NIEのページ」を掲載。毎週日曜には小中学生向けに「週刊さんいん学聞（まなぶん）」も掲載しています。

新聞コンクール優秀作品は各地で展示する

島根県にはNIEの推進母体として行政や教育現場、新聞・通信各社や学識経験者で1995年に設立された「島根県NIE推進協議会」があり、山陰中央新報社は事務局を務めています。

新聞は学年、教科を問わず、まるごと活用できる魅力的な教材です。山陰中央新報社は活用法の相談や実践例の紹介に応じています。気軽にお問い合わせください。

Newspaperプラス（就活生、社会人向け新聞教室）

NIB（Newspaper In Business＝ビジネスに新聞を）にも取り組んでいます。社会人対象の新聞活用講座「Newspaperプラス」では、企業のニーズに合わせ、新聞記者経験のある講師や現役記者が出前講座を行います。新聞やSデジを活用し、情報収集力、分析力、コミュニケーション力など、仕事に役立つ能力を磨きます。

自分の住む地域から世界の国々、身近な催し物から政治経済まで、新聞にはありとあらゆる情報が載っていて、めくるだけで広く世の中を知ることができます。幅広い知識は顧客との会話の種に、大事なことをズバリと伝える新聞記事の書き方は、報告書や企画書を書くのに役立ちます。記事の中に新規事業のアイデアを見つけられるかもしれません。

企業や事業所で行う社員・職員への一般研修や新入社員、若手社員、営業向けなどの個別研修をはじめ、就職活動中の学生、現場への着任を控えた警察学校生など、社会に出る前の準備としての講座も行っています。

Newspaperプラス新聞教室

さまざまな形で社会に貢献

●子どもご縁食堂

幅広い世代の人が交流し、にぎわう場を設けようと2022年10月、「子どもご縁食堂」を松江市殿町の本社近くで所有する「殿まちギャラリー」を改修し、開設しました。

新聞社が食堂を運営しながら、情報発信することで、子ども食堂の取り組みや支援の輪がさらに広がることを願って設けました。社員と地域住民がボランティアスタッフを務め、毎月第2、第4水曜日の午後5時45分から約2時間オープン。訪れた親子連れや地域の高齢者が、会話を弾ませ、夕ご飯を楽しんでいます。

●山陰中央新報政経懇話会

「時代を読む」「ニュースの真相に迫る」をキーワードに、島根新聞社当時の1968（昭和43）年6月、社会貢献事業としてスタートしました。現在は松江・米子境港・浜田・益田地区の4懇話会（会員総数約200人）を運営しています。中核事業となる講演会は、共同通信社と連携して4地区いずれも2カ月に1回（年間計24回）開催し、政治・経済・社会・文化・芸能・スポーツなど各分野の一流講師を招いています。新聞とは別の角度で真相・深層に迫る情報小冊子「政経週報」も届けています

●山陰中央新報 社会福祉事業団

1979（昭和54）年に設立。ボランティアグループの発掘・顕彰、青少年の健全育成、そして民間福祉団体への助成、被災地への救援活動など幅広い福祉活動を展開しています。活動資金は、地域の皆様から寄せられる温かい寄付によっています。義援金の受け付けはこれまでに、東日本大震災や能登半島地震、熊本地震、西日本豪雨などで行い、日赤島根県支部や被災自治体を通じて被災地へ送りました。また、年末には歳末助け合い「愛のともしび」募金活動を実施し、寄せられた浄財を、福祉施設やボランティア団体などに配分しています。

●地域開発賞、スポーツ優秀選手賞

地域開発賞贈呈式

「地域開発賞」は、長年にわたり地域社会の発展に尽力している人たちを顕彰する制度です。スポーツ・文化・教育・産業（2部門）・社会の5賞を設けており、1956（昭和31）年から続くスポーツ賞をはじめ、それぞれの賞が古い歴史を誇っています。選考の対象は、「受賞を機に益々の活躍が期待される社会の一隅を照らす隠れた功労者」とし、行政を中心とした関係各団体による推薦・選考を経て受賞者を決定しています。

スポーツ優秀選手賞表彰式

「スポーツ優秀選手賞」は、全国大会で優秀な成績をあげた島根県内の中・高校生を表彰するもので、1989（平成元）年に創設しました。将来を担う若い選手たちの大きな励みとなっており、2014（平成26）年から、国際大会や日本選手権で活躍した選手を対象とした特別表彰制度も設けました。

●山陰インド協会

山陰とインドの経済・文化交流の懸け橋として2012（平成24）年に発足した「山陰インド協会」（会長:松尾倫男山陰中央新報社社長）の事務局を担っています。同協会は、インド哲学の世界的権威で松江市名誉市民の中村元博士記念館が開館したのを機に、主にインドとの経済交流を拡大しようと組織されました。活動は、日印両国の大使館、総領事館が支援するなか、島根、鳥取両県をまたぐ中海・宍道湖・大山圏域の市長会や商工団体、大学、企業など産官学連携で進展しており、地方創生事業としても注目を集めています。

総会であいさつする松尾倫男会長

●島根県茶道連盟

島根県茶道連盟（会長:松尾倫男山陰中央新報社社長）は、松江藩松平家七代藩主松平治郷（号:不昧）の功績により、松江に息づいた「茶の湯文化」の振興組織として、2014年3月に発足し、山陰中央新報社が事務局を務めています。

会員は、県内で活動する11流派16団体の約2,800人で、茶道の継承や発展はもとより、茶道未経験者に「抹茶・お菓子のいただき方」「お点前のいろは」を教える「松江藩 ちゃのゆの学校」に講師を派遣し、後継者育成事業にも協力しています。

ともに歩む関連会社

<山陰中央新報セールスセンター> 松江市嫁島町1-27

創立は1977年。営業エリアは島根、鳥取の山陰両県全域。新聞折り込み広告チラシの取扱い業務のほか、山陰中央新報本紙の普及、本紙や生活応援情報紙「りびえーる」の広告営業、テレビ、ラジオの総合広告代理業務など、新聞関連を中心とした幅広い業務を手がけています。広告を通じてクライアントと地域をつなぐ役割を果たしています。2017年の40周年を機に、呼称を「山陰中央新報SC」としました。

<山陰中央新報松江南販売> 松江市上乃木4丁目8-25

前身の山陰中央新報販売から1997年に分離、2016年に旧山陰中央新報松江北販売と合併し現在に至っています。旧松江市内に８営業所を配置、鹿島町・八雲町にも営業所を設け、きめ細かい読者サービスの実現を目指し、日々山陰中央新報の販売業務を行っています。

ポスティング事業、地元特産品の通販、年２回の朝市の開催など、住民とのふれあいを大切にし、地域と密着した営業活動を展開しています。

<中央新報サービス> 松江市殿町383　山陰中央ビル3階

1991年に創立した山陰中央新報の販売会社。米子、境港から松江、出雲、雲南、大田に7の営業所を設けています。エリアが広く環境も違うため事業、営業活動等は地域によって異なりますが、住民に愛され親しまれる地域密着型の企業を目指しています。

<SCアドクロス> 松江市学園1丁目16-1

2017年4月に創業した総合広告会社。地域創生に結びつくコミュニケーション方法研究、地方創生事業アシスト業務、指定管理者業務、マーケティング業務、広告代理店業務、イベントプロダクション、クリエイティブデザイン、Eコマースなど幅広い分野を手掛けています。保険代理店業務も行っています。

<山陰中央新報製作センター> 出雲市斐川町上庄原1318

山陰中央新報の印刷部門として、2008年に独立しました。本紙、別刷りの印刷をはじめ、受託印刷なども行っています。タワー型と呼ぶ輪転機はコンピューター制御によって、同時にカラー24ページを含む最大40ページの新聞を印刷する能力を持っています。最大24ページ（カラー16ページ）印刷できるバックアップ機もあります。2016年1月18日に見学者ホール「しんぶん学聞館」がオープンしました。

<山陰中央新報いわみ開発> 浜田市竹迫町2886

島根県石見地区で、新聞・テレビ・ラジオ・雑誌・WEB等の広告、事業運営、企画提案などを中心とした事業を展開しています。街づくりをコーディネートし、地域活性化を応援しています。

<中央ビル> 松江市殿町383 山陰中央ビル2階

<山陰中央テレビジョン放送> 松江市向島町140-1